

(映画『大好き ～お母さんと奈緒ちゃんの50年～』から)
お母さん「神様がさ、奈緒ちゃんを使いによこした
かな…。奈緒ちゃんが、多分私を変えたんだと
思う」
かんとく「奈緒ちゃんがお母さんを育てたのかな？」
お母さん「本当にね。でも友達みんな、“子どもに
育てられたわよね”って言うよね、みんな…」

映画『大好き』は、奈緒ちゃんのお母さんの
語りで構成されているドキュメンタリーだが、
「私は奈緒ちゃんを育てた、と言うよりも育て
られた」という言葉がはしばしで語られている。
映画『奈緒ちゃん』もある意味、奈緒ちゃんに
育てられた映画だと言えるかもしれない。とい
うことは、私も、「奈緒ちゃん」に育てられた
ということか…。ずっと私は映画に育てられた
とってきたから本望だ。

大学を出てプータローをしていた時に、ひょ
んなことから映画の世界に拾ってもらったのは
50年ほど前…。奈緒ちゃんが生まれる二ヶ月く
らい前だったと思う。姉が、奈緒ちゃんに育て
られた50年は、私が映画に育てられた50年と
ピッタリ重なるのだ。

映画のナリワイは、私には学校以上に色々な
ことを教えてくれる場だった。学生時代、勉強
が嫌いでもほとんど勉強らしいことをした記憶が
ないくらいだったが、その分、映画を創るため
に必要なかられて本を読み、文章も書くようにな
り、人前で喋ることもできるようになった…。
「学生時代、勉強しなくてヨカッタ…」と、
ウソブキながら映画を創る喜びを生きてきた。

映画創りが一番教えてくれたのは、何よりも
人間の魅力だと思う。まずはスタッフの存在。
一筋縄ではいかないガンコ者揃いの一人ひとり
と関わり合いながら、イメージを映像や音にし
ていく。カントクの仕事は、人間の面倒臭さと
人間の素敵さを同時に受け止め、押しくら
頭しながらのナリワイなんだ…。けれども、

一人ではできない仕事だからこそ面白い、と私は
ずっと思ってきた。

ドキュメンタリーの被写体も色々なことを教え
てくれた。奈緒ちゃんだけではなく、今まで撮影
させてもらった一人ひとりが見せてくれた日々、
聞かせてくれた言葉が、今の私の人間性を創って
くれた、と言っても過言ではないと思う…。

片想いかもしれないけど、惚れ込んで好きにな
らなきゃ映画創れないからね。ヒューマンドキュ
メンタリーって、ラブスターみたいなもんだもの、
私にとっては。

映画を観てくれるお客さんの存在も、映画創り
の人との出逢いに欠かせない体験だ…。

お逢いしたこともないお客さんの、一人ひとり
の声にいつもいつも励まされているんだ。

(映画『大好き』に寄せられた感想から)

かんとくの「創ってよかった！」という映画は
そのまま「観てよかった！」でした…

伊勢さんの眼差し、さらには「月」の視線というのか
もっとずっと遠くの方から注がれている眼差し
のようなものを受け取りました。

なんて温かい…なんて優しい…
涙が溢れてきました。

映画は観る人の中で始めて映画になる…という
ホントウを感じさせるお客さんの声に触れると
「映画」に感謝したい気持ちになる。
奈緒ちゃんのお母さんが、奈緒ちゃんに感謝した
くなるように、育み育まれ…だ。

「奈緒ちゃん」に、育み育まれ、
「映画」に、育み育まれ、
ありがとう。

伊勢 真一